

心に届く
信心真話

みたま様の声なき声



「どうか平和な世の中に…」

太 平洋戦争の終結から60年が過ぎ

ようとしていた平成15年、私は初めて沖縄遺骨収集に参加しました。

沖縄戦最後の激戦地となった「摩文仁(まぶに)の丘」から海側に入った断崖が収集場所でした。熱帯樹木が生い茂り、いまだに黒々と焼けた艦砲射撃弾の跡が所々にありました。

私はベテランの方から

少し遅れて、生い茂る木々の中を進んでいくと、木に白いビニール袋

がぶら下がっているのが目に入りまして。「何だろう」と中を見て、思わず「ぎゃー」と声を上げて飛びのきました。そこには何と、真っ白の頭蓋骨が入っていたのです。

その時、参加者の一人が戻ってきて、断崖の上を指さし、「あの小さな松の木に引っ掛かっている

た」と言われました。60年もの間、野ざらしになっていたのです。

二 日目は、自然壕(こう/ガマ)での収集でした。摩文仁の丘の平和祈念公園内に建てられている慰霊碑のすぐ後ろにあつて、人一人

通るのがやつとの穴を7、8メートルほど下った所での作業では、ご遺骨をはじめ、軍刀や手りゅう弾、弾丸のほか、手鏡やくし、せつけん箱

赤十字マークの入った鞆、手帳などがごんごん出てきました。軍人だけでなく、民間人がいたことが分かります。その人

たちには親があり子があり、夫や妻があり、友があり、恋人がいたことでしょう。それが戦火の下

で追い詰められ、こんな狭い壕の中で、何を思っ

て亡くなっていかれたのか。そんなことを考えると、何とも言えない気持ちになりました。

私たちは、壕の入り口から3メートルほど上がった平らな場所に白布を敷き、見つかったご遺骨

や遺留品を並べました。すると、どこからともなく黒アゲハ蝶が現れ、

白布の上を旋回し始めたのです。そして私の目の前に飛んできては、また白布のところへと戻って

いきました。それを3回繰り返しました。

私は、ご遺骨のみたま様が来られていると直感しました。というのも、

その前日、地元の方から、「沖縄では、みたま様が黒アゲハ蝶に宿って

戻ってくる」と聞いていたからです。

一 の時、みたま様の声なき声がか心に聞こえたように思いました。「なぜ、人は今なお戦いを繰り返しているのか。こんな悲しみは私

たちだけでも十分。どうか平和な世の中に、平和な沖縄にしてください」と。私は震えが止ま

らず、ただみたま様方に申し訳ない気持ちでいっぱいになり、その場でお

わびしました。

戦争は、殺し、殺され、

焼き、焼かれることで

す。痛くて、臭くて、心

細くて、腹が減り、苦し

くて、とても恐ろしいものでしょう。また、今もなおその後遺症に苦しむ方がおられるように、戦争の苦しみは、一度終戦したら何十年も消えること

ではないのです。

人 間の親たる天地

金乃神(てんちかねのかみ)様は、神の氏子である人間同士が争う姿を、どれだけ嘆か

れていることでしょうか。また、みたま様方も、愚かな戦いは二度と起こさないようにと訴え掛けておられるのではないのでしょうか。

放っておけば争ってしまう愚かな私たちであるからこそ、改まりを祈り、平和への意志を強く持たせて頂きたい。そのために一人でも多くの方に、みたま様方の「声なき声」を聞いてもらいたいと、毎年、若者たちに

声を掛け、遺骨収集に参加させて頂いています。

※このお話は実話をもとに執筆されたものですが、登場人物は仮名を原則としています。